

エッセイ
No.32おのゝり つちどろり
浮萍 一道 開く

●NPO法人ホップ

障害者地域生活支援センター

代表理事 竹 田 保

近年は、桜の開花が早まる年が増えています。温暖化との関係で心配されることも多く、自然の変化を手放しで喜べない面もありますが、私たち重度の障がいのある人にとっては、寒さの厳しい時期が短くなり、外に出やすい期間が長くなることに助けられる面もあります。冬の間は、外出そのものが大きな負担になります。春になって桜を見に出かけ、季節の移ろいを感じられることは、生活に彩りを与え、社会とのつながりを感じる大切な機会でもあるのだと思います。

春はまた、進学や就職など、新しい生活が始まる季節でもあります。学ぶこと、働くこと、自分の進む道を選ぶことは、誰にとっても大切なことです。ただ、私たちにとっては、そこに「支援」という大きな要素が加わります。どこで学ぶのか、どこで働くのかという選択は、本人の希望や努力だけで決まるものではなく、その地域で必要な支援が受けられるかどうかによって大きく左右されます。

制度も少しずつ前に進んできました。札幌市では令和6年4月1日から、重度訪問介護利用者を対象に、大学等への通学や大学等の敷地内での身体介護などを支える「大学修学支援事業」が始まっています。これは、重度障がいのある学生が学び続けるために必要な支援体制を、大学側が十分に整えられるまでの間、通学や学内での支援を行う仕組みです。国でも、「雇用施策との連携による重度障害者等就労支援特別事業」が令和2年に創設され、通勤中や職場で必要な支援を行う市区町村事業として、各地で導入が進められています。制度の上では、重度障がいのある人が学び、働くことを支える道が、以前より広がってきたと言えます。

けれども、実際には「制度がある」ことと、「安心して使える」ことは同じではありません。

大学修学支援事業にも利用対象者や大学側の要件があり、就労支援のほうも自治体の事業と企業側の助成制度との組み合わせが必要になるなど、仕組みは決して単純ではありません。厚生労働省の調査でも、自治体ごとの運用の違い、サービス資源や人材の不足、相談支援体制の不十分さなどから、必要な支援につながることで自体が難しい実態が示されています。制度は前に進んでいても、その内容が十分に知られていない、手続きの複雑さなど利用の広がりが追いついていない面もあると思います。

もちろん、本人の努力や工夫は大切です。しかし、重度障がいがある場合、努力や自助だけではどうにもならないことがあります。必要な介助者が見つからない、地域によって使える制度が違う、相談先が分かりにくい、といった問題は、本人が頑張るだけで乗り越えられるものではありません。だからこそ、支援が足りないときには、その困りごとを周囲にどう伝えるかも大切になってきます。

自分に必要な支援を求めることは、ときに「わがまま」と受け取られてしまうことがあります。けれども、学びたい、働きたい、住みたい地域で暮らしたいという願いは、誰にとっても自然なことです。そのために必要な支援を求めることまで、遠慮しなくてよいはずですが、ただ、理解してもらうためには、伝え方の工夫も必要です。何に困っているのか、どの場面で支障があるのか、どのような支援があれば安心して通学、通勤、生活ができるのかを、できるだけ具体的に伝えることが、家族や学校、職場、相談支援専門員、行政の理解につながります。上手に伝え、理解してもらう努力は、決して自分勝手になることではなく、必要な支援を現実につなげるための大切な力なのだと思います。

春の桜は、新しい始まりを感じさせてくれます。その門出が、障がいのある人にとっても希望あるものとなるように、制度がもっと分かりやすく使いやすくなり、困りごとの声がきちんと受け止められる社会であってほしいと思います。そして私たち自身も、必要なことを遠慮なく、けれど丁寧に伝え合える関係を広げていきたいものです。